

SELF HELP GROUP

Wendy²¹

ウエンティ21は障害のある人の社会参加を支援するグループです。



2019年11月 VOL.131

タイトル 47ッ!



タイトル かみ



日本の神々を描いた会社

羽季 のぼる

7・ひとつの詩

三ヶ月後――

ようやく、主治医から退院の許可が出て、両親が彼を迎えに来てくれた。太郎の目には、幼い日から変わらない両親のやさしさが印象的で、涙がこぼれた。

家に帰ると、鶏が静かに、

「ココー……」

と鳴く中を、落ち葉が、軽く舞っていた。

年の瀬に、テレビを付けると、司会のアナウンサーが、

「いつも何度でも聴いて下さい。」

と言つて、指揮者や、何百人もの人達が、みんな、
「千と千尋の神隠し。」の主題歌の大合唱をしていた。その歌声を聴いた時、彼は、生きていくことの、なんとも言えない、すばらしさを感じていた。

「千と千尋の神隠し。」は、ドイツのベルリン賞や、米国アカデミー賞も受賞した。テレビで、ある若者は、

「この作品は、夢の世界へ、どこまでも連れて行ってくれるんだ！」

と言った。また、

「日本の文化で表現されたからこそ、良かったなと思います。」

そういう学者もいた。

ある日太郎は、母から、「千と千尋のロマンアルバム。」という、大きな本を買ってもらった。そして、ページを三枚めくると、「あの日の川で。」という詩に目が留まった。それは監督が書かれたひとつの詩だった。太郎は、病院の入退院で、過去の出来事が分からない。けれど、彼の胸に、遠い夏の記憶がよみがえった。小さな橋の向こうに立って、太郎を、やさしい目で見てくれた大人の人の。「もしかして、あの人が、『千と千尋の神隠し。』の監督ではなかったのか。」と、彼は思ったのだ。

(おわり)

